
とべない悪魔

桜 子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とべない悪魔

【Nコード】

N9916G

【作者名】

桜子

【あらすじ】

僕が出会った少女は、最悪にひねくれていた。車椅子に座って下から睨みつけてくるんだ、本当に敵わないよ。僕は自分のこと、相だなひねくれ者だと思ってたけど、下には下がいるもんだね……。これは、不良だった頃の僕と、未だに病んでいたころの彼女のお話ありふれた、だけど僕にとっては替え難い経験と思い出。高校一年生の初夏の出来事。

まえがき ひねくれ者の回顧録（前書き）

あらすじとはリンクしてないので、今はまだ楽しめるものではない
と思います。

次回投稿分から本格始動しますので、適当に読みとばしてください。

まながき ひねくれ者の回顧録

高校生だった頃の僕は、とにかくひねくれていた。

例えば、一人称がオレの小説は読まなかった。理由は、地の文だとオレがボクに変わっているから。

例えば、不良だった。自分で言うのもなんだが、喧嘩は強かった。負けたのは、まあ一度か二度か。それで友達や家族に心配をかけたことがどれほどだったか、そんなの気にも留めなかった。

世界は自分がいなくても回ると信じていた。

それは間違いないのだが、当時の僕は大切なことを見落としていた。

僕が望もうと望まなくとも、僕は誰かの世界に組み込まれていた。それこそもう、否応無しに。

いつだってそうだ。高校生は深く考えずに、感じたままに決めつける。その方がすっきりして、何かと楽に生きることができるのだから。

だから僕は大切なものを見落としていた。決めつけて、振り返るうとしなかった。

気がつくのはいつも、何かを無くしてしまってから。

それさえ分かっていたならば、人はもっと利口になれるってものだ。そうだろう？

投げやりで適当な父親も、何かと口うるさい大樹も、うさん臭い修司も、面倒くさい三枝も。

きつとそうやって、当時の僕より大人になっていたんだ。

だから僕が大人になるのも、自然な流れだったんだ。大切なものは誰にでもあって、それをいつか失うことって、イヤになるくらい必然のことだから。

これからのお話しは、云うなれば僕の成長記録だ。馬鹿でひねく

れていた僕の、成長の物語。

聞こえはいいが、平たく云えば恥ずかしい身の上話。幼少時代の寝小便だ。読み返すたびに顔から火が出る。

ついでにいえば、胸の辺りがキリキリ痛む。

それでもこうして文章にしたのは、そうするしか他に無かったからだ。それが良いって思っているから。

それじゃあ高校生の頃と変わんないって、突っ込むのは止めてくれ。僕なりに考えて、考え抜いて、迷って、悩んだりして。そうして決めたことだから。

この本を読んでみてほしい人たちがいる。

僕を世界に受け入れてくれた、多くはないが少なくともない人たちに。

僕を拒んだ、多くの人たちに。

僕を知らない、そりゃあもう沢山の人たちに。

書くとしたのは良いけれど、どこから書けば良いのかは知らない。

なにせ、僕は小説家なんかじゃあないのだから。それに、そんなに読んでもいない。あんまり好きじゃなかったからなあ、読書。

けどまあ、いいか。僕なりに思ったことを書いておこう。

僕の通っていた高校は、公立の荘青間高校っていう所だった。

元は江戸時代の藩校をモチーフにしたとかで、東京六大学に卒業生を出したりもした、それなりの学校だった。

もっともそれは、僕が入学する10年以上も昔のことである。とつくに落ちぶれていた荘高は、奇しくも当時の教頭のボーリングのスコアと偏差値が一致していたのだ。あときはみんな、そりゃあもう笑ったさ。自分たちのヘタレ具合を忘れるためにね。

そこには馬鹿とか不良とかがいっぱいいて、僕は馬鹿で不良だった。馬鹿は認めはしたけど、当時の僕は不良だなんて思ってたなかった。ちよつとニコチン依存症の、よく喧嘩を売られるどこにでもい

る高校生。

ああ、思い出すだけで泣けてくるぞ……。

その荘青間高校には僕の友達がいたりして、まあそれがきっかけだったんだ。

会うはずの無い僕たちは、そいつがいなけりや赤の他人で終わっていた。

それは一年生の初夏、僕が授業を抜け出してバイトに行つてそこでタバコを吸っていたらたまたま近くにいた高校の先輩にカツアゲされてそのまま殴り合いになって止めに入った店長が怪我して僕たちが停学を食らって大人しく家にいて、ようやく学校に行けるって時のこと。

きっかけのメールは未だに保存してある。記念に。

From・後藤修司

Sub・進学情報

我がぼらんていあ部ノいべんとニ参加シロ。ソシタラ進学クライサセテヤル。有リ難ク思工。詳細ハ後日。

アホみたいなメールだろ？　こんなのが彼女との出会いのきっかけだなんて、世も末だと思うよ。

でもこれが事実なんだ。

それじゃあさっそく書いていこうかと思う。僕が嫌いな一人称オレの地の文ボクな話ではなく、三人称語りの物語を。

それと、ネタバレしないように言っておくけど、僕が彼女を失ってしまったとか、そういう話ではない。先ほどと言ってることが違うのだが、まあそれでもこれは僕の成長の物語なんだ。

最後に。このお話で僕と彼女の仲について、あまり期待しないで書いてほしい。成長記録なんて言ったけど、僕にとってはいろんな意味で胸が痛くなるお話でもあるんだ。

事実は美しくも汚なくもなく、いつも淡々としているものだから。

第一章 友達（前書き）

軽かったり重かったり、そんなお話です。
この章は軽いはずですから、
どうか気楽にお読みください。

第一章 友達

小宮山幹が登校したのは、十三日ぶりのことだった。

気になっていた先輩方の反応は目立ったものがなく、先生たちも目を合わせようとはしない。別に警戒していたわけではないのだが、静かな学校生活を送れそうで一応安心である。とはいえ、まだ学校に来てから一時間と経っていないのだが。

クラスメイトといえば、学年一の問題児の復帰を心待ちにしていた様子も無く、遠巻きに見られるか、睨まれるかだった。もつとも、ちやほやされたかったわけでは決して無いのだが。

幹の隣の席に座っていた少女と目が合った。すごい早さで目を背けられた。さすがにこれには苦笑するしかない。

しかしまあ、何事にも例外はある。

「おはよう、幹。おつとめご苦労さん」

幹の前の席から声をかけてきたのは、クラスメイトであり友人の後藤修司。細目でいつもニコニコ笑っている、うさん臭い男である。「おつす、後藤」

短く挨拶をしてから、自分の席に腰掛ける。修司は体を後ろに向け、椅子にまたがるようにして幹の方に向き合った。

出席番号が近く、そのため幹と修司はなにかと授業で組まされることが多い。なし崩し的にそのまま友達になったのだが、クラスメイトからすれば修司は貧乏くじを引いたようなものかもしれない。

幹も友達は少ない方だが、修司だってそう多くはない。

不良などと呼ばれて敬遠される幹とつるめば、誰でもそうなるのかもしれないが。

九年間同じ学校に通っていた大樹が別の学校に行ってしまい、少しは寂しくなるだろうと思っていた。それがふたを開けてみれば変なやつに捕まってしまうのだから、世の中はうまくできている。

自分の席に座ってから、自分がいない間に席替えがあったと気づ

いた幹だが、あえて触れないことにした。自分の前後が全く代わっていないのは、誰の差し金だろうか。

「どうだった、今度の謹慎は。やっぱり退屈だった？」

「ああ。テレビはもう見飽きたし、ゲームなんかも無いから本格的に死にそうだった。くそ、もう謹慎なんかしねえ」

ゲームもあるにはあったのだが、キレた大樹がPS2に熱湯をかけて壊したのだ。おかげでDVDを見ることもできなくなった。小宮山家にはパソコンすら無い。

「あはは、まあ、学校に出て来ることができてよかったじゃないか」
椅子をがたがた揺すりながらしゃべる様子がなんともガキっぽいのだが、指摘したところでどうにもならないだろう。別にそれで困るわけでもないし、幹は放っておくことにする。

「幹がいなかったから、三枝さん寂しそうにしてたんだよ」

「……三枝が？」

あの三枝が寂しそうにしている様子をイメージしてみたが、すぐにあきらめた。

「全く想像できねえ」

「うん。三枝さん、小宮山がいなかったからかわりにクラスの他の皆に怒鳴り散らしていたんだよ」

僕もいっぱい怒鳴られたんだよ、と言いながら修司はニコニコしている。こいつはマゾなのか？

幹は今度は三枝が説教している様子を思い浮かべてみた。やっぱり無理だった。

「あいつは口より先に手が出るぞ」

実際三枝千紘という女の子は、幹がヤニ食っているところに出くわすといきなりローキックを繰り出し、更にクリーンヒットするまで執拗に攻撃してくる。

学級委員として当然の行動だと彼女は言っていたが、何が当然なのか幹にはいまいちわからなかった。

その割には教師に密告したりすることもなく、普段は割と五分の

関係だつたりする。幹自身、彼女のことを悪くは思っていないかった。「いつも蹴っている幹がいなかったから、物足りなかったのかもしれないね。」

「蹴られるのは俺だけってことか？」

「あはは、嫌そうな顔しない。そこは喜ぶところだよ」

そう言われても幹にはMっ気がないのだから、イマイチ理解しがたい話である。

「後藤ってMだったのか？」

「いや、そっちの気は無いんだけどね。三枝さんはかわいって話だよ」

男二人でそんな非生産的なことを話していたのだが、よからぬ話のときに限って噂をすればナント力である。

「私がどうかしたの？」

と後ろから声をかけられた。

修司からは正面だが、幹には真後ろ。首だけひねって久しぶりのクラスメイトの顔を拝む。

つややかな黒髪を背中まで伸ばした女の子だった。女性らしいラインを描いた胸や腰のふくらみ、小さな顔にバランスよく配された目や鼻。顔立ちは冗談みたいに整っているのだが、その分険しい表情が強調されている。

一年一組の学級委員、三枝千紘である。

「やあ三枝さん、お早う」

先ほどの言葉はもうどこかに飛んでいつてしまったのか、何事も無く話しかける修司。幹からすれば、こんなときにもう少し焦ってくれたら人間臭いのと思う所である。

幹は「お早う」とだけ短く言った。特に言うことが思い浮かばなかったただけなのだが、何か言う必要があるわけでもない。

「……なに、小宮山ってもう謹慎終わったの？」

鞆を机におきながら、つつけんどんに千紘は聞いてきた。乱暴においたためか、先輩の使い方が悪くてガタがきていたためか、机が

一瞬おおきく傾いだ。それを見て千紘はさらに渋面。幹の隣の女の子は余計にびくびくしだした。

「ふうん……。ま、どうでもいいけどね。あんまり迷惑なことをするんじゃないわよ」

「はいはい」

「はいは一回」

「なんであんたがそれを言うのよ」

「いやー。実は僕、一度これ言ってみたかったんだよねー」

あははと笑いながら頭をかく修司に、やれやれといった様子の幹と千紘。出席番号が一続きだったため三人は何かとつるむことが多く、千紘がきてからようやく幹は学校に戻ってきた実感が湧いてきた。

「それと小宮山、これ」

そう言って手渡されたのは、どこにでも売っていきそうな大学ノートだった。

表にタイトルや名前などは無く、一見新品のようだが、触ってみると書き込まれたノートに特有のゴワゴワ感があつた。

もちろんこんなノートを持っていた覚えなど、幹には無いのだが。

「これは？」

「あんたが停学中の授業の内容をまとめたやつよ。いらないんだったら返しなさい」

学年一の千紘がまとめたノートを手放すつもりは無い。役に立つのは間違い無しだ。

「いや、ありがとう。助かるけど、これ、わざわざ作ってくれたのか？　しかも俺が休む前の内容もはいつてるし……」

感謝しながらもつい思ったことをいつてしまう幹。

休んでいたときの分は当然としても、これは中間から後の授業範囲をほとんど押さえているんじゃないのか？

彼の素朴な疑問に千紘はと言えば、

「べ、別にあんたのためにそのノートをつくったんじゃないんだか

らね。私が期末の準備でやっていただけよ！」

顔を赤くして否定する千紘はそれはそれでかわいいのだが、幹にはそれよりも修司のにやにやが気になって仕方が無い。

「……なんだよ」

「いやあ、相変わらず仲が良いなあって思ってたね」

いつものことだが修司の感性についていけない幹だった。

千紘は千紘で「違うんだからあ」などと一人でいつている。何となく間が持たなかった幹は携帯を取り出してメールの確認をしようとした。いつもマナーモードにしているので、着信に気づかないことが多いのだ。

そこで幹は唐突に昨日受け取ったメールのことを思い出した。

「なあ後藤、昨日送ってきたあのメールは何だったんだ？」

「ああ、あれね。そういえば三枝さんにも話してなかったよね」

いきなり少ししじめな雰囲気修司と、それを感じた千紘が身を寄せてきた。千紘の髪からシャンプーの芳香が漂ってきて、思わず身を引いてしまう幹。健全な男の子の反応だった。

そしてやはり相変わらず軽い感じで話し始める修司。この男はある意味いつも自然体だ。

「幹が今回も問題起こしたから、いよいよ長曽根先生が怒ってたね。幹を留年なり退学させようって息巻いてるらしいんだ」

思わず目を合わせた幹と千紘。二人とも唐突な話に取り残され気味だ。

「だからさ、長曽根先生って進級にかなり発言力があるらしいんだけど、その先生が幹のことをよく思っていないんだよね。あの先生が言い出したら、他の先生も反対しにくくなるから」

長曽根教諭は40半ばで、莊青間高校で11年も数学を教え続けている。しかも進学部長であり、強豪陸上部の顧問でもあり、その影響力は教頭以上の噂である。

そして、フリーダムな先生の多い莊高において、生徒指導の厳しさは他の追隨を許さない。

幹たち不良の天敵である。

幹は長曽根の顔を思い出すと、急に煙草を吸いたくなった。

「でも、これ以上問題起こさなけりゃ退学にはできないだろ？」

幹は何気なく聞いてみた。

「問題起こさない、できる？」

「タバコさえばれなければ」

喧嘩は強いが好きでない幹は、率直な感想を述べてみた。喧嘩は無くても生きていけるが、ニコチンはそうはいかない。

修司が何か言おうとするが、千紘がそれより早く口をはさんできた。

「ばれなきゃ良い？ あんた、そんなこといつてたらすぐに退学になるわよ。あんたみたいな現実認識の甘い馬鹿は、真っ先に淘汰されるのよ。覚えときなさい、この社会不適合者」

「……ま、そういうことだね」

苦笑しながら同意する修司。きつい言い方に軽くへこむ幹。隣の女の子は千紘の剣幕にビビりまくっている。

心配してくれてるのか信用してくれてないのか、どちらともとれそうだ。

「それと、期末が始まるのが明後日水曜からなんだよね。10日も休んだんだから、三枝さんのノートがあってもきついと思うよ。赤点は固いね、ガチだね」

笑顔でキツイ言葉をかける修司に、幹は軽くめまいを覚えた。

幹はあまり頭は良くない。中学の頃から双子の大樹との成績差が開いていったことや、中間をぎりぎりで切り抜けたことを忘れるわけが無い。自分の馬鹿さはよく知っている。

まだ留年が決まったわけでもないし、実感など湧くはずもない幹。だから冗談半分で聞いてみた。

「なあ、俺が留年したら悲しいか？」

もちろん冗談半分だ。狙ってなどいない。

しかしそれは不意打ちだった。

特に、千紘に獲つては。

「べ、別に小宮山がいなくなつたつてその……」

ゴニヨゴニヨと口ごもる千紘を尻目に修司はにこやかに答える。

「僕は寂しいよ、他に友達いないから。三枝さんもそうじゃない？」

「……それってどういう意味よ」

「友達は大事だよ？」

適当にごまかす修司は、幹にとって本当に友達なのだろうか。

引つかかるものが多すぎる幹であった。

「とにかくこのままだと幹の進級は危ないつてわけだよ。普通は赤点の一つくらい、補修なり土下座なり賄賂なりで解決できるけど、それを長曽根先生が許してくれない。そこで僕は渡辺先生に相談したつてわけさ」

一年生はあまり知らないはずのまめ知識を披露する修司。たのもしいが、うさん臭い。

渡辺は長曽根の学生時代からの先輩で、いろいろと弱みも握っているらしい。普段はや二で黄ばんだヨレヨレの白衣を着ている冴えない化学教師だが、長曽根に対抗できる貴重なキャラクターとの話だ。

ちなみに荘青間高校の化学部は部員0で潰れてしまい、渡辺はボランティア部の顧問を専任している。その唯一の部員にして部長であるのが後藤修司だ。どれだけうさん臭ければ気が済むのだろうか。二人の視線を無視してひょうひょうと話つづける修司は大物かもしれない。

「そしたら条件付きで力を貸してくるつて言ってくれたんだ」

いまいち信用ならなかった幹だが、悪くない話だと思った。渡辺のことはよく知らないし、授業も受けたことは無かったが、古株の教師だということは知っていた。

あれで着こなしに気を使えば、とも思ふのだが。

「で、その条件は？」

「期末後のボランティア部の活動に参加することだよ」

前言撤回。やはりろくでもないやつだ。白衣もどうだっていい。顔に出ていたのだろう、修司は取り繕うように言葉をつづける。

「まあ、それは赤点だったときの最終手段だからね。実技教科を含めて赤点さえとらなきゃいいんだよ」

そういわれても自分の馬鹿さ加減はよく知っている幹だった。小さい頃から双子の大樹と比較されてきた身の上だ。ついこの間の中間調査もぎりぎりだった。

かといって留年するつもりはこれっぽっちも無いし、ボランティアに行く気もない。

ついでに学力も足りない。

何となく机のなかに手を伸ばす幹だったが、そこで触れたのは先ほど千紘がくれたノートだった。

そして、後ろの席の才女の方を、つい見てしまう。

「…放課後、教室に残ってなさい。できる限りは教えてあげるから」

いつもよりしおらしい声で、顔を逸らしながら千紘は言った。

後日、幹の初ボランティアが決定した。

三枝千紘の名誉のために言っと、悪いのはテスト中に寝た小宮山幹である。

第二章 Go（前書き）

投稿の後に気づきましたが、木の名前は

「あすろな」ではなく「あすなろ」でした。

特にストーリーに支障が出るわけでもないので、

あえて訂正はしないことにします。

ただ、今後はこのようなミスが無いよう、気をつけたいと思います。

第二章 G o

天気は快晴。からつとした夏空に、吹き寄せる風はどこか涼しい。遠くを流れる入道雲が、何か別世界の代物に思える。

自分のタバコの煙も、あの雲のようにいつかなるのだろうか。ぼんやりとした頭は、陽気に包まれて眠りこけそうだ。

「おはよう、幹！ よかった、ちゃんと来てくれたんだね」

爽やかな修司の笑顔も、とにかく見飽きた幹にとっては嫌みにしか思えなかった。

幹はそれまで吸っていたマイルドセブンを携帯灰皿にいれ、友人に片手で挨拶を返した。

日曜の朝8時から呼び出されのは駅構内の大画面の前。人の通りが多いから、そこを避けて東口に立っていた幹は、もし見つからなかったら帰ろうなどと内心思っていた。

もっともそれも、見つかってしまつては仕方ない。面倒だが進級のためにはやむなし。そう自分に言い聞かせる幹だった。

「おつす。渡辺先生はまだか？」

「いや、もう来てるよ。幹が集合場所間違えてたんじゃないか」

その辺りはノーコメントで、幹は修司のあとに続く。いずれにせよ避けて通れぬ道なのだ。

大画面と東口はたいした距離を隔てているわけではないが、小さな店が並んで雑多な通りを作っている東口は、大画面から見通しが利きにくい。

逆に大画面前にいる人間は、割とどこからでも確認しやすい。

幹はすぐに渡辺を見つけた。

そして吹いた。

「渡辺先生、幹君を連れてきましたよ！」

「ああ、ご苦労」

タバコを革靴でもみ消しながら、中年教師は応じた。白髪が目立

つ頭にヨレて黄ばんだ白衣、安っぽいYシャツに、ネクタイの柄は何故かハ。ヒ。

ネクタイを除いて、普段学校で見かける出で立ちだ。どこにもいる化学教師。

今日は課外活動なのに。

突然周囲の視線が気になりだした幹だったが、既に手遅れだった。普段の猛犬を怖々覗くような視線より、イタイネクタイを巻いた中年を哀れむ視線は、何倍も辛かった。

「おう、お前が小宮山幹か」

フルネームで呼ばれた幹は、一応挨拶しておいた。頭を下げた拍子に視線はどうしても。ルヒに行ってしまう。

それに気づいた渡辺は照れたように笑いながら、

「これな、中学の娘がくれたんだよ。誕生日プレゼントだった。お前そんなの何年ぶりだよって言ってやったら、あいつ照れてそのまま部屋に帰りやがったよ」

多分、娘には相当嫌われているのだろう。幹は適当に相づちを打った。突っ込む気にはなれなかったのだ。

どうよ？ と問いたげに修司を見るが、こちらはいつものニヘラ顔。参考にならなかった。

「先生、似合ってますけど、今日は外しといた方が良いでしょう。子供につかまれて引つ張られたら、首が絞まって命に関わりますから」
「おう、それもそうだな。向こうに着いたら外すか」

どうもこの中年はいろいろ勘違いしている節がある。娘のプレゼントを撫でながら、心無しか上機嫌に答える渡辺。幹は修司の表情を伺ったが、動揺は見受けられなかった。

力づくで外させようかとも思ったが、余計に悲しくなりそうなのでやめておいた。

「それじゃあ移動するか。8時22分のバスがそろそろ来るはずだ」
好奇の視線に見送られながら、三人はバスに乗り込んだ。
もちろん車内も針のムシロだった。

障害は個性である。そういったのは誰だっただろうか。

本人にその気はなくても、知らずのうちに差別扱いしてしまう。それが障害というやつだ。

それは健常者の側だけでなく、障害者の側にもある。

健常者も障害者も、みんなで遊ぼう・楽しもう。そんな小さなこと、関係ない。小学生から高校生まで、総勢34人が集まって交流を深めようというのが本日のイベントの趣旨だ。

立派なことだと幹は思った。そして、自分には場違いだとも。

あまりに健全な集まりなので、かえって気が引けてしまう。喧嘩の方が楽だとさえ思える。

自分は何をしているんだ。

密度の高いバスの中で、幹はそんなことを考えた。

ただ、不思議と進級のことは頭から抜けていたのだった。

バスが到着したのは駅を出てから10分ほどしてからだ。その頃には渡辺からネクタイを外すことにも成功し、鬱の種も一つ減っていた。

なんとかするしかないか。無理矢理前向きになる幹だった。

「そんな固い顔をしちゃ駄目だよ。もっとスマイルでね」

あとからバスを降りてきた修司にたしなめられる幹だが、それで表情が和らぐなら世話ないということだ。

ジト目で修司を睨むも、平然と流される。不良どもをビビらせる視線も、この男には通じない。これが友達というものなのだろうか。「いくぞ、二人ともついてこい」

後から降りてきた渡辺が先立って歩き出した。2人はそれについていく。

用賀北小学校は鉄筋の4階建てで、グラウンドには最近の流行で芝を敷き詰めてある。築20年は経っているであろう校舎にはよく見たらヒビが入っており、補強剤が注してある。この手の校舎にお

約束の時計は、やはりというか止まっているようだ。

個性がでないのも学校の特徴だろう。だから、ふとした違いが嬉しく感じられるのかもしれない。

慣れない芝のグラウンドからは草いきれがしそうなほど、気温が上がってきた。今日は30度を超すだろうとテレビで言ってたことを思い出した。

「体育館はアレか。もうあらかた入ってんだろうな」

そんなこと言いながらのんびり歩く渡辺と生徒二人。初めて来た小学校をいろいろ観察しては、自分のところと比べてしまう。こっちの方が狭いのかな、と幹は思ったが、自分が大きくなっているからそう感じるだけかもしれない。

「気楽にやってくれたらいいよ。僕はこれ7回目だから知り合いも多いから適当にやらせてもらうしね。あ、でも担当の子から目は離さないでね」

さり気なく職務放棄ギリギリなことを言う修司だが、悪びれた様子も無い。幹からすれば肩すかしなくらいだ。

煙草は吸えそうにないな、そんなことをぼんやりと思った幹だった。

会場である体育館には子供が30人ほど、大人が10人ほど。

子供たちのうち車椅子に乗っているなど、分かり易いのが数人いる。一方で教師と保護者だろうが、大人たちは皆一様に小綺麗な身なりをしている。

「なんだよ、俺、浮いてんじゃねエのか？」

皆まで言うなよと幹は思ったが、もう突っ込む気もなかった。いちいち渡辺の相手はしない方が良さそうだ。

修司の方を見ると、こちらは誰か知り合いを見つけたようだ。大きな声で呼んでいる。

「村越さん、こっちこっち！」

どうやら村越さんというらしい女の子に声をかける修司。幹はと

言えば、年長組になるほど女子の比率が上がってきていることに今更気がついた。それも普段は縁のない、草食系の女の子ばかりだ。

「後藤さん、久しぶり〜！」

小さく手を振りながら駆け寄ってきた村越さんに、笑顔で応える修司。

「元気そうだね、村越さん。滝さんと笹岡さんはどうしたの？」

「サエコちゃんは今日お休みで、充ちゃんは向こうで進行の確認をしていますよ」

はきはきとした受け答えが活発な印象を与える女の子だ。充ちゃんらしき女の子に向かって、元気に手を振っている。制服に名札がついているから、中学生だろう。修司の後輩だろうかと思つた。足が少し太いようだが、気にするようなほどでもなかった。くりくりした瞳が印象的だ。

村越さんはやや無遠慮に幹と渡辺を見て、問いたげに修司を見る。この辺りの反応も、幹の周りの女どもには無いモノだ。

「こっちの制服が小宮山幹で、こっちが渡辺先生だよ。渡辺先生はボランティア部の顧問で、幹は部員じゃないけどヘルプで来てもらったんだ」

微妙にぼかした表現の修司だが、幹は何のためにここに来たのかを思い出した。

「初めまして、設楽三中の三年で、ボランティア部の部長をしている村越あすろです。後藤さんとは三年前から知り合つて、時々お世話になってます」

どうやら修司の後輩ではないらしい。しかも設楽三中は幹の母校だったりする。俺の後輩かよ、と内心一人ツツコミの幹。

「おう、俺は渡辺だ。今日はガキどもに任せるつもりだから俺の仕事を増やすなよ」

「小宮山幹だ。今日一日よろしく」

手短に挨拶し、その後すこし4人で談笑した。渡辺はいよいよやる気が無いこと、村越は毎年この集まりを楽しみにしていることな

どが分かった。

どうやら村越は幹の悪名を知らないらしく、修司の友達という所に食いついてきた。いつもと勝手が違いすぎるので、どこかこそばゆいような気もする修司。村越の邪気の無い目と目が合ったのに、帰りたいと思ってしまう。

「それじゃあ私は向こうに戻りますから、後でまた会いましょうね！」

中学生の若さに若干引いていた幹は、ようやく一息つけた。

「それじゃあ僕たちも行こうか。高校生はあっちだから村越さんたちとは別だね。渡辺先生はあっちの保護者・教職員の席に行ってください」

かくして小宮山幹の初ボランティアが始まったのだった。

子供たちは3人から4人のグループに分かれて遊ぶことになるらしい。小・中・高のバランスをとりながら、年長組が障害を持った子供たちの世話をするようにくじ引きでグループ分けされる。

子供たちの障害の重さはまちまちだが、重い症状の子供には付き添いの親が来ているのだとか。オリエンテーションではそんなことを確認した。

編成の都合上、幹は修司と必ず別グループになるようだった。心細いと言うよりむしろ、投げ出された感じがした。何しろ年下を三人預かれと言われたのだ。ここに来て割と責任重大な気がしてきた。「大丈夫ですよ、みんな良い子だから手はそんなにかかりませんから」

そういつてくれたのは同じグループになった村越あすろだった。これから障害を持った子供たちの名前が書かれたカードを引くというところで、4度目の参加である村越はなかなか頼もしかった。

「あすろ、って変な名前だな」

物怖じしない村越にむかって、ついストレートに聞いてしまった幹。応える村越にも気にしたふうは無い。

「裏山にあるアスナロの木からつけられたんですよ。小学校の頃は嫌いだったけど、今では結構気に入っているんですよ、この名前」

「へえ、アスナロの木ねえ」

あすなろがどんなものか、全く分からない。水戸黄門の時間にC
Mで流れる、例の名前も知らない木を思い浮かべる幹であった。

「なんか、名前に縁がありませんか？ あたし、これから小宮山さんのことを幹さんと呼んでいいですか？」

別にかまわないけどと言いながら、くじは幹たちの番を迎えた。

残り6枚のカードから、2枚を引くとのことだ。

「それじゃあ1枚つつ引きましようか」

放っておくと勝手にしゃべるあたりは修司に似ている。それとも
気づかないだけで、実は幹が聞き上手なのだろうか。

裏返した画用紙から1枚、幹は手前のカードを右手で引いた。そ
の横で村上が同じようにカードを引いている。

さて、そこに書かれた名前は……

「……サメ？」

鯨??????

市川沙雨というのが、少女の名前だった。幹が最初に見た車椅子
組の一人で、歳は村越と同じくらいだろう。終始うつむき加減で表
情はよく見えない。背は座っているから分からないが、やはり村越
と同じくらいか。ただしこちらは、胸も足も腰も細い。

達筆で二文字だけ、素っ気なくサメとあった。その味気なさがか
えって幹には印象的だった。

村越が引いたカードには、判別不能なミミズのような文字と、横
に小さく巽裕太と書いてあった。小3くらいの男の子で、目の焦点
がいまいちあっていない。感情のみられない無表情には、千紘のそ
れよりも冷たいものを感じた。

幹にはその男の子よりむしろ、付きっきりの母親の方が印象深か
ったのだが。

かくしてグループ分けは済んだのだが、このメンバーを取り仕切るのはどうやら幹になりそう。村越と巽ママの視線が痛い。

けどまあ、腹をくくるしか無い。これは一応、任せられた仕事なのだ。

「それじゃあ、一人づつ自己紹介からしようか。順番はチビからでいいかな」

幹なりに精一杯なのである。無理矢理の笑みもいっぱい。それでも巽ママからはそれなりに評価されたようで、裕太と一緒に自己紹介をしてもらった。見た所40くらいのおばさんは、敵にすると厄介な人種なのだ。

巽親子の自己紹介が終わると、幹は礼を言っ2人を下がらせた。ここまでは順調。

「そんじゃあ次は、市川さん」

幹は車椅子の少女の名前を呼んだ。

さて、市川嬢はどんな自己紹介をしてくれるのか。

「あなた、タバコ臭い」

まあ、自己紹介ではなかった。

「さっきまで吸ってたんでしょう？ シャツにこびりついてるからすぐ分かるわよ」

自己紹介というよりむしろ、ダメ出しだろうか。

さあ、どうしようか。なにやらピンチだったことは幹にも分かった。巽ママの視線が極太レーザーみたいに突き刺さる。村越はタバコの臭いを渡辺のモノと思っていたのだろう、驚きの表情は失望の現れなのだろうか。

「あたし、もう帰るから」

元々来る気はなかったと捨て置いて、さっさと出て行こうとする市川。か細い腕で車輪をまわし、体育館の出口へ向かう。細身の体が余計に痛々しい。途中で他の人にぶつかりそうになるが、自分から避ける気はなさそう。人込みをかき分け、強引に突き進もうとする。

幹には最初、それを止めることができなかった。

ただその時には、村越の視線も巽ママの視線も感じられなかった。なぜか、少し離れた所にいた修司と目が合ったのだ。

何を分かったつもりなのか、親指をぐいっと車椅子の少女に向け、二カッと笑う修司。

『GO!』

それは直感だった。

それを見た幹は、跳ぶように走った。距離にして20メートルも無い体育館を、軽やかに人を避けながら。少女が苦勞して抜けた道を、いとも容易く力強く。

健常者と障害者、その差を誇示するかのように。

あつという間に追いついた幹は、車椅子の後ろのハンドルを捕まえた。驚いて振り返る少女の顔が、目と鼻の先にあった。

何を驚くのだから。体力くらいしか取り柄の無い幹だ、この程度のことは朝飯前のこと。

美しく整った少女の顔立ちを、幹はその時初めて見た。忘れもしない、水晶のような瞳の輝き。珊瑚のように、可憐な唇。その表情に浮かんだ驚愕。幹は、それを永劫覚えてのことだろう。

「小宮山幹だ。好物はタバコ。よろしくな」

ヤニ臭い挨拶。それが少年と少女の出会いだった。

第三章 生きて苦しみ、そして死ぬこと（前書き）

細部に書き換えなどをしました。

読みやすくなつていれば幸いなのですが……。

第三章 生きて苦しみ、そして死ぬこと

幹と沙雨は二人で体育館の外に出ていた。二人つきりなのには別に深い意味があるわけではない、村越が異親子にくつついて、それで2と2に分かれたのだ。

先ほどの一件で、巽ママからはすっかり嫌われた様子だった。今回あつまった子供たちのなかでも裕太君の障害はかなり重い方らしく、母親心理としては心配したくなるのは無理もないことなのか。その辺りはいまいち実感を持ってないから、幹としては大人しく距離を置くしか無いのだが。

町で不良に絡まれる方が数倍楽ではないかとさえ幹は思った。まったく、なんという社会不適合者ぶりだろうか。

そしてその社会不適合者は今、おんなじくらいダメかもな女の子と二人きりだったりする。

屋外の風に艶やかな黒髪が揺らされて、微かな芳香が漂う。ひよつとすると、その香は彼女の美貌から立ち上っているのかもしれない。珊瑚を思わせる淡い唇から、かすかな吐息が漏れる。その度に周囲の風景が鮮やかに塗り替えられるようだった。

「帰りたい」

そんな見目麗しき性悪女の吐く言葉からは、もちろん愛も情も感じる事ができない。強いていうなれば嫌悪感。幹には馴染み深い負の感情である。沙雨の冷たい言葉は無視するのが良いとすぐに分かったのだが、それでも会話をしないわけにもいかない。

「同感だな。けどな、これをきっちりやらないと、俺は高二にならないんだ。今日だけ付きあってくれや」

もつとも、幹の言葉もかなり自己中心的なものなのだが。元々あまり他人に気を使ったりしない二人なのである、沙雨からの返事も期待してはいなかった様子だ。

幹は芝のグラウンドを眺めながら、車椅子を押す手を休める。休

日だが、グラウンドには子供と大人が何人が見られる。元気にはしゃぐ子供たちが帽子をかぶらされているあたりに、育ちの違いを感じる幹だった。

「それにしても暑いな」

思わず空を見上げながら幹はつぶやいた。朝から続くピーカン晴れは、外にいる二人を容赦なく照りつける。ちなみに幹は沙雨に日傘をさしてあげていて、下手に動けない分余計に暑苦しい。

そんな幹の苦勞も完全シカトしながら、沙雨は自前の扇子をぱたぱたと扇いでいる。

実は、日傘をさしたまま扇子で扇げと命令をしたのだが、幹には相手にすらされなかった。幹は沙雨の抗議には耳を貸さず、日頃の愚痴をこぼしたりしていた。悲しいことに、日頃から横暴な女やマイペースな友人と接しているからか、幹はこの手の理不尽には耐性がついているし、適当にあしらう術もあるのだ。

「なあ、体育館に戻らないか？」

立っているだけで流れ落ちる汗を拭いながら、幹は何度目かの説得を試みる。

やけどしそうなほどの炎天下にわざわざやってきて、かといつてなにをするわけでもない。校庭では何人かの子供たちが遊んではいるが、眺めるだけでそこに沙雨がはいっていくとも思えなかった。

「戻りたかったら一人で行きなさいよ」

「お前はどうするんだよ」

「お前っていわないで」

「そりゃ失礼」

やれやれと幹は思った。沙雨はさっきからこんな調子で、会話を続けようとしなかった。話しかけなければまるで一人っきりのように黙っているの、幹としては何とも据わりが悪い。

まったく、どうしてさつさと家に帰ろうとしないのだろうか。進級のことを抜きにしてもここを離れたくない自分がいる、そのことがなお一層分からなくて、妙な気分である。

例えば幹が沙雨に惚れてしまったとか、そんな分かりやすい図式だったらこのモヤモヤは感じずに済んだのだろうが、実際そんなわけでもない。黙っていれば間違はなく美少女なのに、他人を寄せ付けないカベを築き上げてそこから出てこようとはしない。かなり扱いにくい女の子である。

そんな風なことを考えていたから、それはまさに不意打ちだった。「ねえ、あなたは どうしてこんな所にきたの？」

「え？」

沙雨の方から何か話しかけてくるとは思ってみなかつたし、頭の中で微妙にけなしていたというのもあつた。思いがけない彼女のひとことに、幹は素で驚いた。

そんな幹の反応が面白くなかつたようで、今度は少しかだけ語気を強めて、顔を見ずに沙雨はもう一度尋ねた。

「あなた、来たくて来たわけじゃないんでしょ、何か事情でもあつたの？」

事情、か。事情ですか。

「いや、大したことじゃないけどな。これにこないと二年生に進級できないかもしれないんだ。つっても、来たからと言って絶対進級できるってわけでもないんだけどな」

「あなたって、馬鹿なの？」

「どっちかつつーとな」

幹の周りは、頭がいい人間ばかりである。沙雨が知るはずも無い出来のいい双子と比べられている気がして、幹は何ともいえない感じがした。

「勉強は苦手だし、頭がいいってほめられたことも無いからな。多分馬鹿だよ」

「そう、本当に馬鹿ね」

沙雨はほんの少しだけ、悲しそうにつぶやいた。

あきれた風に馬鹿だといわれるのには慣れていたが、これは今まで幹には無かつたパターンである。もしかすると、あまりの馬鹿さ

加減に同情されたのだろうか。

もちろんそんなことではなかったのだが、沙雨の言葉は、思ったよりも重いものだった。

「さっきの異って男の子はね、神経の病気で顔の表情を作れないのよ。いつも無表情で、何を考えているか分からなくて、生まれて一度も笑ったことが無いの。あの子の母親が言ってたわ、裕太が笑ってくれるなら、自分は死んだって良いって。神経でも脳でもあげるから、裕太に笑って暮らしてほしいって」

感情を込めずに、沙雨は淡々と言葉を紡ぐ。その手の爪が車椅子の肘掛けに深く食い込む。幹は、それをまっすぐに見ることができずに顔をそらした。

「ここに来る連中はね、大なり小なり抱えているものがあるの。助かりたい、助けてあげたいって願っても、それを自分じゃどうにもできない。だから余計にイライラして、そのイライラをぶつける相手もいなくて、抱えてるものだけどんどん膨らんで押しつぶされそうになるほど苦しむことになるの。そうして潰されてしまわないように、心が折れないようにするために集まって励ましあうのよ」

幹は黙ってそれを聞くしか無かった。言葉がでないのは、自分が責められているのが痛いほど分かるから。

セーラー服の肩が、かすかに震えている。何もできない無力な幹は、黙って車椅子のハンドルを握ることしかできない。

「だからね、あなたみたいな何も考えずに来た人は場違いで目立つし、とても見苦しいの。みんな一生懸命やっているのに一人だけ何の覚悟も無くてふらふらしていて、それを悔しいって思う人はたくさんいるのよ」

「俺は……」

何かを言おうとしても、言葉が後に続かない。言い訳が頭をよぎってはすぐに消え、そして無力感が湧く。

沙雨は幹を責めてはいなかった。ただ、諭していたのだ。

押し殺したような沙雨の声が、幹の心臓を強く決る。

「嘘よ」

一瞬、幹はその言葉の意味が分からなかった。沙雨は相変わらず顔を見せない。

彼女の声は、ただただあっけらかんとしていた。

「今のは冗談よ、全部ってわけじゃないけど、ほとんど嘘っぱち」

沙雨の声は、むしろ今までになく明るかった。

もう、グラウンドを走り回る子供たちは見ていなかった。ようや

く幹を見据えた瞳は、ただただ固い色をしていた。

その落差が、幹にはどうしようも無く悲しかった

幹は馬鹿みたいに固まって、言葉も発せなかった。

「もう分かったでしょ。私はあなたにここにいてほしくないからあんなこと言ったの。言ってる意味、分かるでしょう？ だから、もうさっさと帰ってちょうだい」

幹がコンビニにつくと、ちょうど渡辺が店から出て来たところだった。手にしているゴールデンバットのフィルムを早速はがしながら、ポケットのなかからライターを取り出そうと悪戦苦闘している。どちらか片方づつからやればよいものを。

「火、貸しますよ」

「おお、悪いな」

幹がバットに火をつけると、渡辺は煙を腹にためて、美味そうに吐き出した。

「俺も吸って良いですか」

「おう、他のにばれないようにしろよ」

一応断りを入れてから、幹はマイルドセブンに火をつけた。ようやく一服することができ、生きた心地がして来た。美味そうにマイルドセブンを吸っている幹を見て渡辺はにやにやしているが、あえて相手にしなかった。幹にはこれくらいの味がちょうどいい。

コンビニの駐車場で吹かしながら、何も話さずに3分ほど過ぎた。

灰をアスファルトに落としながら、渡辺は幹にようやく話しかけた。
「あのかわいい嬢ちゃんはどうした、振られたのか？」

「まあ、似たようなもんですね」

吸いさしを携帯灰皿に収めながら、幹は答えた。渡辺は大分短くなったバットを大事そうに吸っている。あれでは指が熱そうだ。

「惜しかったなあ、アレは今日集まったなかでもピカイチだっただろ？ まあ、家の娘ほどじゃないがな。それにしても、いい感じに二人つきりになれてたのによお。何がいけなかったんだ、ええ？」

新しいタバコを取り出しながら幹は、

「俺みたいに適当なやつは嫌いらしいんですよ」

「はは、そいつは手厳しいな。あ、灰皿貸してくれないか」

「あ、どうぞ」

吸いさしを捨てると、渡辺も新しいタバコを取り出して火をつけた。同僚に見られたら懲戒免職くらいいきそうなのに、全くそんなことを考えていないようだ。普通に煙の味を楽しんでいる。

「バットって、そんなに美味いんですか？」

「美味いんだけどな、おんなじ箱のタバコでも味がバラバラだったりするんだよ。オレはその安っぽいのが好きなんだよ」

なにやら嬉しそうにバットを語る渡辺。よっぽどタバコが好きなのだろう。

「一本貰ってもいいですか」

「おう、そいつを吸ってからだな」

そう言つて悪戯っぽく笑うから、渡辺の方がよほど子供っぽく見える。本当に残念な先生である。

「渡辺先生って、どうして教職に就いたんですか？」

「どうしてって？」

質問に疑問型で答えられても困る。

「ガキの世話なんて嫌でしょ。面倒くさい」

「んー、まあな。面倒つつたら面倒なんだけどなあ……」

渡辺にしては齒切れが悪いと思いながら黙って続きを待つ幹。幹

の右手のマイルドセブンはちびて、フィルターの近くまで火は来ていた。

「他に仕事なかったんだよなあ。オレも勉強しないで走ってばっかりだったから、勉強も面接の練習もしてなかったんだよ」

「陸上ですか」

「おう、4年のときは400のイーヌだったんだぞ」

渡辺が陸上をやっていたという噂は本当だったようだ。だとしたら長曽根が頭が上がらないって話も本当かもしれない。みすばらしい化学教師を見て、幹はちよつと失礼な感想を持った。

「ガキの世話は確かに面倒だな。何遍言っても理解しない奴なんかは実際しばき倒したくなるくらいだ。でもな、毎年受け持ちの生徒のなかから、必ず一人は面白い奴が出てくるんだよ。教師が面白いっていえるとしたら、まあその辺じゃねえのか？」

「それって後藤のことですか？」

「おう、あいつはなかなか面白い奴だな。人畜無害な顔してなのに四六時中怪しいこと考えてやがるからな」

「俺みたいなのはつまないでしょう」

「いや、そんなことはねえな。さっきのアレはなかなか面白かったぜ」

体育館での一件を蒸し返され、少しバツの悪い幹。それを見ながら渡辺はにやにやするから、余計に面白くない。

おそらく顔に出ていたのだろう、渡辺は悪い悪いと言いながらバツを一本幹にすすめ、ついでに自分のも取り出した。

「さっきですね、言われたんですよ、ここは何も考えてないような奴が来る場所じゃないって。意外とこたえましたね、ほとんど核心でしたから」

貰ったばかりのタバコに火をつけながら幹は言った。安いバツトは臭くてイガッぽかったが、タバコっぽさを感じさせる味わいだった。吐き出す煙は風にさらわれ、霞となって消え失せる。その様だけは、セブンのそれと少しも変わらなかった。

「先生は、どうして俺なんかをここに連れて来たんですか？」

ここ数日、頭の隅を離れなかった疑問を幹は口にした。言いにくいと思っていたのに、意外と本人と会ってみればかなり口に出しやすかった。

それを聞いた渡辺は、それこそ苦虫を百匹くらい噛み潰したような顔をした。かなり意外な反応に、幹は驚いてしまう。

「そこは大人の事情なんよ」

「かなり雑な言い訳ですね」

「修司の奴に頼まれたからじゃ、だめか？」

「教えてくれなかったら化学準備室までつきまといますよ」

一度聞いてしまったら答えてもらうまで満足できない。幹はこれだけはどうしても答えてもらうつもりだった。

先ほどの沙雨の一件もあり、少々ヤケクソでもあった。

幹のバットがすっかり短くなるまで迷ってから、観念した風に渡辺は答えた。

「大学の頃な、オレと葉介と紅は同級生だったんだよな」

短い言葉は、かなり意外なものだった。幹は思わず耳を疑ったが、渡辺の表情が本当だと語っていた。

なにか思う所があったのか、ぽつりぽつりと渡辺は語りだした。

「葉介とは大学からだったけど、紅とは高校から一緒でな。それまで話しかけることができなくて、高校を出たらもう会えないって思ってたんだよ。それが入学してから同じ大学の同じ学部だって分かってな、オレなりに頑張って話しかけたんだよ」

フィルターしか残っていないバットを捨て、渡辺は革靴でそれを踏みつぶす。

今日は人の話を聞いてばかりだなと、幹は思った。

「葉介とはサークルの新歓で知り合って、家も近かったからよくつるんでたんだ。学科もサークルも違ったけど、一番仲良くしていいよ、二人でパチンコに行ったり雀荘に行ったりして、バカみたいなことをわんさかやってな。たこ焼きを食いたくなっただから車で大阪

まで行ったのは傑作だったなあ。つつても、最近は滅多に会わないし話もしてねえけどよ」

それは、本当に独り言のようだった。幹のことなど忘れたように、自分に言い聞かせる風に渡辺は語った。

幹は母親のことを思い返した。幼い頃に死別した母の顔は、もう遺影からしか浮かんでこない。美しい表情は、30を前にして永遠にその時を止めていた。

それから、日頃母のことを全く話そうとせず、墓参りさえ一人で行こうとする父のこと。幹は母の命日には、いつも大樹と二人で参ることにしている。その日は父を一人にして、そっとしてあげることに。いつしかそれは、小宮山家の暗黙の了解となっていた。

もう十年近く経ったのに、時折こどもみたいなすね方をする父親。そして、その父と同じ女性を想っていた男が目の前にいる。

幹が、大樹が、葉介が、渡辺が。誰がどれほど強く願おうと、その女性は二度と帰ってくることはない。

世界は狭く、人間は卑屈だ。一体神様は何を考えてこんな世界を作ったのか。

「お前とはいっぺん会って話をしたかったんだ。今更どうにかなるわけじゃないけどな」

ヨレヨレの白衣にネクタイすらしていないYシャツの中年が、今朝より老け込んで見えた。

案山子になった幹に向かって、これで終わりとばかりに渡辺は続けた。

「生きた人間なんて、どうとだって出来るんだよ。どんなバカでもそれは変わらん。死んだらそれで仕舞いだ、生きてる奴らを後ろにおいて、こっちはもう追いつけねえ」

やってられねえよなど、タンと一緒に吐き捨てるよう呟いた渡辺。幹は何も言えずに渡辺の足下を見ていた。

足下の吸い殻は熱を失い、もう煙を立てることも無い。

何もしゃべれなくなった幹と渡辺は、馬鹿みたいにその場にただ

突っ立っていた。

第三章 生きて苦しみ、そして死ぬこと（後書き）

登場人物の読み方を書いときます。

小宮山幹 コミヤマ ミキ

小宮山大樹 コミヤマ タイキ

後藤修司 ゴトウ シュウジ

三枝千紘 サエグサ チヒロ

市川沙雨 イチカワ サメ

巽裕太 タツミ ユウタ

小宮山葉介 コミヤマ ヨウスケ

小宮山紅 コミヤマ コウ

（一部割愛）

第四章 賭け（前書き）

書いているうちに、物語の終わりが徐々に見えてくるものです。

ラストはあらかじめ決めていたのですが、そこに至る道のりはぐちゃぐちゃ。

ここがこうなっただけになるから、最後はこう。

そうして物語は形になっていきます。

書く楽しさと苦しさは、紙一重なのですね。

まさに、産みの苦しみというヤツでしょうか。

第四章 賭け

小宮山幹には母親がいない。まだ幼い頃に生き別れたため、記憶も曖昧にしか残っていない。

恵まれた国である日本でもそう珍しいことでないだろうし、幹本人もそれを特別不幸だとは思っていない。

よくある不幸とは割り切れないが、それにこだわるほど繊細にはできていないのだ。

母の不在をどう感じるか、幹は一度大樹に聞いてみたいと思っているが、それは未だに実現していない。幼い頃からほぼ独学で家事をこなしてきた大樹は、決して自分から母親のことを語ろうとはしない。毎年、母の命日には朝から一人で弁当を作り、そのくせ幹が誘うまでは家から出ようとはしない。そしてその日は決まって無口でいる。

もしかしたら、幹の知らない所で何かがあったのかもしれない。それが大樹に何か影響したかもしれないし、しなかったかもしれない。そもそも何も無かったかもしれないのだが、今更聞けるようなことでもない。

その大樹だが、今でこそ信じられないが、小学校にはいった頃にいじめにあっていた経験がある。

当時の父は幼い子供達を一人で養うために、かなり根を詰めて働いていた。父が働いている姿を見たことは無かったが、幼い幹と大樹は、普通の父親は子供が寝てしまってから家に帰ってきて、Ｙシャツを着たまま布団に入るものだと思っていたほどだ。

学校に来てくれる親がいないということはつまり、小学生にとっては絶対的守護者の不在に等しかった。

更に、その頃の大樹は取り憑かれたように家事を勉強していて、クラスメイトと遊ぶことも無く家に帰ることが常だった。必然、友達も目に見えて減ることとなった。

いじめは上履きをゴミ箱に捨てたり教科書を破いたりといった、どの学校にでもあるようなものであったが、もちろんそれは6歳の子供が簡単に受け入れられるようなものではなかった。

一人で抱え込み、幹にも父親にも相談しようとしないう大樹を見かねて、幹は父親を頼った。それは小学生がとる選択として妥当なものだった。

小学生だった幹は、当時の父の言葉を今でも覚えている。

おまえが大樹を守ってやるんだ

こうして幹は父に代わって大樹の守護者となり、大樹のクラスメイトの敵となった。

そして父は、自らが守護者となる道を拒んだ。

父の心は、どこか遠くに置いてけぼりのままだった。

戻って来た幹と渡辺を最初に迎えたのは修司だった。

預かっていた子供を側にいた中学生に任せると、修司は二人の方に駆けつける。

適当にやると言っていた修司だが、一応まじめにはやっていたようだ。それとも、小学生と波長があっていただけなのかもしれないが。

幹も渡辺も急ぐ気になれず、三人が合流したのはちょうど校門の辺りだった。

二人の側に来た修司はまず鼻をヒクつかせると、いつもの笑顔をこころなしか更に明るくした。

「二人ともタバコ臭いね、今まで吸ってたの？」

「あー、わりい。ついな」

あー、こいつやっぱ怒ってるよなー……などと思いながら、ぱりぱりと頭を掻く幹。

短い付き合いだが知っている。こいつはキレイないけど、別の意味で怖い。

「三枝さんが知ったらなんて言うだろうねー」

「いや、ホント悪かったから、それはカンベンしてくれ……」

あまりに悪質かつ合理的な嫌がらせに、戦慄を覚える幹であった。この男なら、それぐらいのことは平然とやってのけることを、短い付き合いのなかで幹は思い知らされている。

先日とった赤点で、幹の臨時教師を務めていた千紘はそりゃあもう見事に荒れた。思い出すと、踵がモロに入った太腿が痛くなってきた。

そんなやり取りをみて、下種な勘ぐりをする中年もいたりした。

「三枝つてのはなんだ、幹のコレか？」

そういつて小指を立てるのだから、さすがにそれはウザイと思う幹であった。

「ただのクラスメイトですよ。それと、俺は大分嫌われているみたいですから」

「ほー、嫌われてんのか」

「そうらしいですねー」

そう言つてなぜか二人でニヤニヤしだす修司と渡辺先生。置いてけぼりの幹は、なんだか面白くない。

「このあと何かあるのか？」

話題を変えるために、幹は言った。もつとも、本当の狙いは別にあるのだが。

それに答えたのは修司だった。

「このあとはみなで昼を食べて、それから解散になる予定だよ。ちなみに僕はここの女の子たちに呼ばれて打ち上げがあるんだけど、幹もどうせなら来なよ」

「ああ、時間が余ったらそうさせてもらうかな」

そう言つたあとにすぐ、タバコと村越あすろのことを幹は思い出した。確証はないが、なぜかそんな気がしたのである。

まあ自由参加なら、出なくてもいいんだろう。年下とか女の子とか、その手のことははつきり言って苦手。さっそく及び腰の幹であった。

「ねえ幹、時間が余ったらってことはこのあと何か用事でもあるの？」

修司は本当に何気なく聞いたのだが、それは幹にとって痛い所を突いた。

さり気なく聞いておくつもりだったのだが、話の流れがこうなってしまうては今更どうすれば良いというのであるうか。

苦虫を噛み潰したような顔をして、それから幹は修司の肩を捕まえてひそひそ話の形に。

こうなつては渡辺だけでも排除してやる。

「おいおい、男同士の内緒話は気色悪いぞ」

「すいません、渡辺先生。俺たち後から行くんで先に飯食っていただきます」

今度は渡辺がつまらなそうにして、それから体育館の方に歩いていった。先ほど修司と一緒にいた子供達と連れ添って、渡辺は小さな男の子の手をつないであげたりしている。

意外な光景に驚いた幹は、こちらを不思議そうに見てくる女子中学生と目が合った。こちらは女の子と手をつないで、隣のアレとは違つて絵になる組み合わせである。

彼らを見送ると、幹は半ばやけっぱちで修司に聞いた。

「なあ修司、お前は七年もここに來てるんだよな」

「うん、そうだよ」

「じゃあ、一見さんとリピーターの見分けもつくよな」

「そりゃあ、一応ね」

ここまで来れば質問の意図は分かっただけらしい。幹としても、サクサク話を進めたいところだった。やけっぱちの願ったりである。

「市川沙雨って分かるか？」

この名前を口にするのは、やはりと云うか重たい気がする。

それでも口に出したのは、自分のためか、それとも彼女のためか。

「沙雨ちゃんのこと？」

「知り合いか？」

「いいや、と言って首を横に振る修司。」

「彼女は今年で二回目で、去年は僕が持てたんだ。難しい子だったでしょ？」

「ああ、見事にやられた」

あはは、と短く乾いた笑いをした修司。修司は校庭に並ぶ木の陰に入ると、手招きで幹をよんだ。

青々と茂った桜の木々は、野球でいうライト側から右中間に、ボールから校舎を守るようにして並んでいる。

風が吹き寄せるたびに、桜の葉は音を立てて風になびく。

「僕もやられちゃってね。多分沙雨ちゃんは僕のことなんか覚えてないと思うよ。だから、知り合いじゃなくて僕が一方的に彼女のことを知っているってこと」

修司は相変わらずの笑顔を揺るがせない。細い目が何を思っているのか、幹には読み取ることが出来ない。

「あいつのこと、知ってるだけ教えてくれ」

幹は懐のタバコに伸びそうな手を押し止めながら、修司の返事を待った。

修司が口を開いたのは、それから一分ほど間を置いてからだった。「沙雨ちゃんはね、小学生の頃に交通事故で足が動かなくなったんだ」

結構大きな事故だった、と修司は続ける。

「僕も少しだけ調べただけど、お父さんと二人で乗っていた乗用車が急カーブを曲がりきれずに、トレーラーと衝突したらいいんだ。お父さんは即死で、沙雨ちゃんは事故で足が動かなくなったってこと」

どちらともなくお互いに目をそらす二人。さんさんと照りつける日差しはどこまでも眩しく、思わず幹は顔をしかめた。

世界中にどれだけの不幸があろうとも、太陽は変わらず光を届けてくれるのだ。

「それから？」

幹は修司に先を促した。

「事故の後、しばらくしてからこっちに引越して来たみたいなんだ。今は母親と二人暮らしらしいよ」

「じゃあ、その事故つてのもそんなに昔のことじゃないのか」

「そうだね、小五で事故に合つて、中学受験つてことでこっちに来たみたいだよ。今は中二、来年は受験生だね」

「そっか……」

交通事故で足が動かなくなった、それは分かる。

だが、分からないのは、

「ふつう、そういう子はこんなとこに来るもんなのか？」

真つ先に思い浮かんだのは巽裕太の無表情だった。沙雨が言っていた通りなら、先天性の病気で表情を作れないとか。字が汚いのも、目がどこか虚ろげだったのも、きっと関係があるはずだ。

幹にからすれば、交通事故の沙雨と生まれつきの裕太とは、質というか、次元の違いを感じるのだ。

そして沙雨の言葉。彼女は帰りたいと言った。意識になるが、ここにいる人間は、何らかの支えが欲しいのだとも言っていた。そして沙雨は、他人を拒絶していた。

幹には、誰かが無理矢理彼女をここにつれて来たように思えた。

おそらく、母親だろう。それくらいの人でないと、あの少女が嫌々ながら来るとは思えない。

「誰かにこう、行きたくないのに無理に行かせられて、それであんなに機嫌が悪くなっちゃったのかな」

「性格が悪いのは元々なんじゃねえのか？」

周りの人間がことごとくいいを性格しているので、性善説など信じていない幹である。沙雨のアレも、素だと思っている。

そんな心ない言葉にも、修司は特にたしなめたりはしなかった。

「でも、幹がこんな風に沙雨ちゃんに興味を持つなんて、ちょっと意外だなあ」

「ああ、そうですかい」

にこやかに言ってくれた修司にトゲトゲしく言い返した修司。なんだかこいつの思うつぼになって来ている気がした幹である。

「いや、別に深い意味は無いんだよ」

幹の視線にも白々しい態度の修司である。不良連中ならこれだけで臨戦態勢に入るのだが、それともこれが友達というヤツなのだろうか。

まるで一方的に怒っているみたいで、決まりの悪さを感じる幹。それを見て修司はやれやれといった感じだ笑ってみせた。

「ホントはね、幹なら沙雨ちゃんのことをなんとかしてくれないかって期待してたんだ」

「そりゃあどうも」

「結果は想像以上だったけどね」

思わずカツとなり、気づいたら拳を振り下ろしていた幹。だが、その拳は修司には届かなかった。

修司はいつの間にか幹の懐に入り、拳でコツンと幹の胸板を叩いた。

驚いた幹を無視して、修司は笑顔で続ける。まるで、茶番を楽しむかのように。

「最初に沙雨ちゃんから逃げられたときは、そんなに心配はしてなかったんだ。僕の時もいきなりバツくれようとしたからね、あの娘」

それから拳を離し、おどけた風に両手を上げながら距離をとる修司。笑顔のまま、幹に語りかける。

幹は先ほどの衝撃もあり、黙って耳を貸すしか無い。

「少しは重荷を背負ってあげて、力になれるんじゃないかって、そう思ってたんだ。だけど、いろいろ話を聞いて、彼女が抱えている事情を知って、僕は沙雨ちゃんのことを諦めたよ。まるで役不足だ

ったからね」

自重気味に話す修司は、俯いて幹と視線を合わせようとしない。幹は友人の意外な言葉に、かける言葉も無かった。

先ほどから修司の思わぬ一面を見せつけらっぱなしで、頭が混乱気味である。

「幹はすごいよ。三枝さんのときもそうだったけど、今度も全然目が死んでないもん。ほんと、よくよく考えたら根拠も何も無いのに、幹ならなんとかしてくれそうだって思えるから」

「三枝は関係ないだろ」

「そうかい？ ごめんよ」

褒めているのかバカにしているのか、修司の顔からはまったく読み取れない。相変わらずどちらともとれそうな笑顔だから。

だからこんな時は、修司の言葉を信じるしかないのだ。幹はそう思っている。

「三枝さんもあの性格だからね、苦労はしているんだよ」

「あいつ、友達いねえからな」

人のことはいえない幹なのだが。

「ホントに見てらんないんだよね、危なっかしくて。でも、そこまですべしはしてなかったかな。どこにでもいい人はいるんだからね」
そうしてまた修司はクスリと笑った。

相変わらず暑い日だ。日陰にいても汗が吹き出てくる。

修司は携帯電話を取り出すと、サイドキーを押して時間を確認した。

「それじゃあ行こうか、もうお昼は残ってないかもだけどね」

「ああ」

全く空腹を感じていなかったから、そんなこと関係のない幹だった。

二人が体育館に戻ってくる頃には、昼食はすっかり終わっていた。もちろん幹達の分は食べ盛りの子供達の胃袋に消えていて、中学

生や居場所を探し始める。

渡辺はすぐには見つからなかった。あの風貌は目立つから、すぐに分かると踏んでいた幹だった。しかし、好き勝手にしている子供達や雑談をしている大人達のなかには、あの白衣姿は見られない。いや、まだ見ていない場所もあるのだが、さすがに違う気がしてならなかった。

それは子供達と保護者が集まって、ちょっとした人ごみになっていた。先ほどから歓声や拍手が起きては、更に人ごみは大きくなっている。

そしてやはりというか、そこに渡辺はいた。

「ほれ、ここを電池とつないでやるんだ」

渡辺の手元には透明なアイスのカップがあつて、それが弱々しく光を放っている。よく見ればカップの蓋からエナメル線が伸びていて、それが単三電池につながっている。

流星は化学教師と言った所だろうか、先ほど食べたばかりのアイスの空が電球になって子供達は大喜びである。

渡辺は嬉しそうにして、一人一人に作り方を手ほどきしている。

さつさと諦めて、見なかったことにしようと思った幹だったが、

渡辺は目敏く気づいた。

「おお、幹！ オレはもう少しこっちにいるから、適当にやっつけや！」

「そうさせてもらいます」

楽しそうな渡辺先生は置いて、幹は沙雨を探しに再び体育館を出た。

沙雨がいたのはグラウンドを挟んで体育館の向かいにあるプールだった。

いくら体育館にスロープがついていたからといって、車椅子でここまで来るのは難儀だっただろう。それに恐らく、沙雨がここに来たのは幹達が体育館に入ったのと入れ違いだったはずだ。まあ何と

言えはいいのか、いい性格をした娘である。

「おい、市川」

無視されるのも覚悟で言ってみたが、返事はすんなり返って来た。

「苗字で呼ばないで」

「じゃあ、おまえ」

「お前っていわないで」

そしたら残るのはアレしか無いのだが、困ったことに幹はアレで呼ぶような仲の人間は大樹しかないのだ。初対面の女子中生相手にアレで呼ぶのはさすがに気が引けるのであった。

「今、キモいこと考えてるでしょ？ 最低」

沙雨のその言葉で、幹は気楽になった。やはり性格が悪いヤツは相手にし慣れているというもの。

「沙雨はどうしてこんな所に来たんだ？」

「あんたには関係ないでしょ？ わたしの勝手よ」

「母親にいわれて来たのか？」

沙雨の目の色が変わった。嫌悪感から、露骨な敵対心に。

車椅子に座ったまま、背の高い幹を睨みつける。それが彼女の戦い方。常に低い所から高い所へ。敵は、自分のいる場所へは降りて来てくれないのだから。

だから幹は、あえて目線の高さを合わせない。尊大に上から見下ろした。

敵は強力だ、下手に出れば食い殺される。

「沙雨、賭けをしようぜ」

「賭け？」

予想外の言葉におうむ返し。沙雨。幹はかまわずに続ける。

「賭けに勝った方が負けた方に何でも一つ命令できる。賭けの内容は沙雨が決めていい」

「私が死ねたっていいなら？」

「二度と顔を見せない、接点を持たないくらいでカンベンしてくれ」
幹を再び睨みつける沙雨。強気な所とか物怖じしない所とか、い

ちいち大樹や千紘に似ていると修司は思った。

それからやや間を置いて、沙雨は口を開いた。

「分かった、それでいい」

それから、彼女は賭けの内容を告げた。

「今すぐ私を走れるようにする。いま、すぐに」

沙雨は、できない方に向けた。

そして幹は、できる方に。

第五章 風とともに（前書き）

何かにきっかけがあったとすれば、
それは大概本人の努力だったりします。

第五章 風とともに

幹は喧嘩慣れしている。なぜならよく喧嘩を売られるから。

小学校の子から意識して周囲に敵を作って来た結果、1対多の状況で戦うことが多かった。結果として、喧嘩に勝つための技術や悪知恵も人一倍である。

高校に入学間もない頃は同級生から、やがて一年で一番強いと噂が立つと、今度は上級生から喧嘩を売られるようになった。

好きほどももの上手慣れとは、よく言ったものだ。

喧嘩が強いからといって、幹は嬉しくも何ともなかった。

幹が一番喧嘩をした相手といえば、やはり双子の大樹だ。

幼い頃からいじめっ子から守ってあげていたというのに、大樹は幹相手にだけは強情であつた。

例えばバニラ味とチョコレート味のアイスがあつたときのこと。甘党の大樹はチョコレートが好きで、幹がバニラを食べてチョコを大樹のために残していたのだが、大樹はなぜか怒りだした。その理由は幹が何の断りも無くアイスを食べたから、そして大樹がバニラの気分だったから。

さすがにこれは理不尽だが、当時の二人の関係の縮図でもあつた。大樹はことあるごとに幹をたより、幹はその都度世話を焼くか突き放すか。

いまとは逆に、幹が大樹の保護者のように振る舞っていた。

また、こんなこともあつた。

当時小学生だった幹は、大樹の机の上に不思議なものがあるのを見つけた。

円筒形のそれは、蓋を外してみると中に赤い棒が入っていた。筒の底を回してみると、それにあわせて中の棒も回りだす。

口紅を知らなかったのは、母を幼くして失った幹にとって仕方の無いことだった。

そして、大樹がそれをどれだけ大切にしていたのかも。

幹が大樹に喧嘩で負けたのは、後にも先にもその一件だけだった。その後、幹は何度も大樹に謝ったのだが、大樹は頑として許そうとしなかった。

幹が何でもするから許してくれと訴えると、だったら口紅を元に戻せと言う始末である。

そうして幹は、途方に暮れるしか無いのだった。

「いちいち分かりやすいんだよなあ」

懐かしい記憶を辿りながら、幹はしみじみと呟いた。

場所は用賀北小学校の前を通る、舗装の行き届いた県道である。

車の通りは少ないが、歩道がしっかりと設けられていて、更に幸運なことに人の通りがまばらだった。

なぜ幸運なのかといったら、それはこれからよろしくないことをする予定だからである。

「何が分かりやすいのよ？」

幹の側にいた少女は、彼の独り言に過敏に反応した。自分のことを言っていることくらい、まあ彼女だってすぐに気づくということだ。

「うーん、なんだろうねえ？」

例えば、無茶苦茶な所とかがいちいち大樹に似ているとか。

もともと彼女に言った所で、分かるはずも無いのだが。曖昧に言葉を濁して沙雨の追求を煙に巻く幹であった。

そんな扱いをすれば当然沙雨は不機嫌になる訳だが、幹はそんなのおかまいなしに準備運動をしている。

夏服のカッターシャツは既に脱いであり、大手スポーツメーカーのロゴがあらわれた白TEEと制服のズボンだけという出で立ちである。車椅子に座っている沙雨を脇に、伸脚やアキレス腱のストレッチに余念がない。

「なんであなたが走る準備をしているのよ？ わたしの代わりに走

るとかだつたら、いますぐ消えてほしい所なんだけど」

「いや、さすがにそれは無い」

さすがにそれは考えていない幹である。足の動かない沙雨を走らせてやると賭けに出て、それはさすがに無い。

一方で車椅子の少女は、これから自分がどんな目に遭うのか想像しながら、内心ビビっているのを幹に悟られまいと必死だった。

「だったらわたしの車椅子を押して走るとか？」

「それもどうかと思うけどな」

どうかと思うんだがなあ……。

幹はついつい沙雨から顔をそらしてしまう。それから学校の壁に足をかけて、ゆっくりと腱を伸ばしていく。

タバコのおかげで持久力はイマイチだが、幹は瞬発力には自信があった。春先に計った50メートル走では、クラスで三番目に速い6秒31だった。もちろんそんなことで運動部からの勧誘があったわけもない。不良はどこまでいっても不良なのだった。

「例えば、沙雨がいじめられているとする」

「あり得ない」

「そこを俺が助けたりしたら、やっぱり感謝くらいしてくれるのか？」

「絶対あり得ない」

「なるほど」

なるほどやはりというか、この娘は大樹によく似ている。無茶で我がままで強情な所とか。幹とはまた違ったひねくれ方をしているところも。

だから、あの賭けもほとんど予想できていた。

だからといってどうにかなるとは思っていなかったのだが。

自分を走れるようにしてみると少女は言った。

少女は走りたいのだ。

「走りたいんだつたら走ればいい」

だから幹は思ったことを言った。それが正しいとか関係なく、幹

にはそれしかなかったから。

沙雨は一瞬驚き、目を細めて幹をひしと睨みつけた。今までに無かった、質量を感じさせる眼力だった。

なぜ彼女のためにこんなことをしているのか、正直いまでもよく分からない。ほっとけないとか、大樹に似ているからとか。後付けならいくらでもできそうなのに、心から思う答えはまた違う場所にある。

分かるはずも無いから、とりあえず今それは脇に置いておくことにした。

「走りたいなら、走れば良いんだ」

更に強く、もう一度言ってやった。

沙雨は静かに怒っていた。久々に感じた本物の憎悪に気圧されないよう、幹は続ける。

「足が動かないんだったら足以外を使えば良い。格好悪いけどな」

「あなたって、想像以上に最低ね」

「今さっき真逆のことを言われた」

あのときはキレて殴り掛かったが、今度はいやに淡々としている。手首を回し、足首を回しながら幹は語りかける。

「走るってのはどういうことだと思うか？」

やや観念的な問いに、沙雨はどう答えるだろうか。

「足を速く動かすことでしょ」

その答えは、なかなか素っ気なかった。

「じゃあ、早歩きと走ることの違いは？」

自分でもよく分からない問いを発する幹。沙雨はこれを時間稼ぎと思っているかもしれない。幹なら絶対そう思っているところだ。

それでも車椅子の少女は答えてくれた。かなり機嫌が悪そうだが、走った方が疲れるでしょう」

実にシンプルな答えだ。まるで幹を小馬鹿にしているかのように。小馬鹿にしているのには違い無いのだが。

「そう、走った後ってのはとにかく疲れるんだ」

そう言いながら幹は何度目かの屈伸をする。深く息を吸いながら、全身の筋肉に酸素を行き渡らせるべく。

「息は上がって、心臓は激しく脈打って、体が熱を持っている。けどまあ、それはオマケみたいなもんだな」

今度は首を回しながら、最後の仕上げに入る。入念な準備運動はもうお仕舞いだ。

「走るってのは、何だろうな」

最後は問いにすらなっていない幹の言葉である。沙雨は可哀想なものを見るように言った。

「さあ、知らないわよ」

「違う、忘れていただけだ」

車椅子のハンドルを握り、初速から全開で走り出す。

「きやつ」

「黙れ、舌嚙むぞ！」

実は言ってみたかったお約束の台詞を口にしてみた幹。平らなアスファルトは車椅子を持ってしても加速の妨げにはならない。力強く足を踏み出す。

前方から来たオバさんが驚きながら道をあける。幹には謝る余裕も無い。

通行人は他にいない、いても止まれるはずが無い。

風になびく沙雨の髪が、幹の胸に触れそうで触れない。ただその香りだけを幹に届ける。幹にはそれを楽しむ余裕は無い。

「しっかり掴まれ、そんで前を見る！」

前を見て走れ、小学校のときには何度廊下で注意されたか。

幹の言葉に、沙雨はしっかりと前を見据えた。風の中に音は消え、霞んだ色が流れては消え行く。車窓から覗くそれとは違った光景は、肌で感じる質量を秘めていた。

強く、つよく、沙雨は肘掛けを握りしめた。その手に、知らずに

公園で遊んでいた子供達が遠巻きに見ているが、それは無視することにする。

「走れたか？」

体中あちこちが痛む幹は、隣の少女に問うた。

「さあ？」

奇跡的に無傷だった少女は、素っ気なく言い返した。

もつとも、すっかり上気した顔ではあるが。それを悟られないようにこころなしか顔を背けている。

未だに心臓の鼓動は収まらない。顔と体が妙に熱っぽい。だが、目頭からはもつと熱を感じる。

恥ずかしくて悔しくて、そして嬉しくて、沙雨は幹を見れなかった。

「風が気持ちよかっただろう？」

「……うん」

「そっか、なら良かった」

一服しようとして、沙雨を見て、やはり止めた。そして、ゆっくりと走りの残滓を噛み締めた。

流れる雲さえ無い空は、吸い込まれそうなほど近くに感じられる。幹はタバコを取り出すのを止め、両手を広げて光を受けた。今はこれで我慢だ。

そのままどれくらい経っただろうか。沙雨が、ぼつりと言った。

「1本くらいなら、吸っても良いわよ」

本当に微かな声で、呟いた。

第六章 別れ（前書き）

区切りが悪いのですが、長くなりそうなのでここでひとまず。
もう少し、この日のエピソードは続きます。

第六章 別れ

幹と沙雨は結局、閉会式をサボった。というより、小学校に戻ってきたらとづくに終わっていただけなのだが。

腕や足に擦り傷をこさえた幹が車椅子を押して戻ってくると、残っているのは修司と渡辺、それに用賀北小の先生だけだった。

携帯電話は持っていたが、いちいち確認はしていなかった。幹達が戻ってきたのは、集合時間から40分ほど遅れた時のこと。修司と渡辺はよもや誘拐かと焦っていた先生方をなだめすかし、こうして二人が帰ってくるのをまっけていてくれたのだ。

これには幹も一応感謝しないわけにはいかない。だが、幹は内心辟易してもいた。

この二人が大阪のおばちゃんよろしく詮索してくるからだ。

「それじゃあお二人さん、若い男女が学校抜け出して何事もなかったって言いたいのかい？ こちとらあ教職22年だ、そんな安い嘘は通じねえなあ」

「そうですか、ボケが来たんならさつさと定年してください」

「ねえ幹、僕たち友達だよね？ だったらつまらない秘密なんて作らない方がいいじゃないかい？」

「お前のほうが隠し事は多いだろうが」

下世話な二人の追求を適当にあしらいながら、幹は思わずため息をついた。

まったく、どうして俺だけこんな苦勞をしているのか……。

そもそもこの女の子にかまった時点で失敗だったのかもしれない。ひよっとして自業自得か？ と思うと頭痛が止まらない幹であった。

「おい沙雨、お前も黙ってないで何とか言ってやれ」

こんな時には舐めた口をきいてくれそうな少女はしかし、日傘を差して車椅子の上で大人しくしている。

幹達と顔を合わせようとせず、先ほどからそっぽを向いたままで

ある。

これでは反抗的というよりもむしろ、借りてきた猫である。

「沙雨、黙ってないで減らず口の一つでも言ってやれ」

「う、うるさい」

「俺に言っでどうするんだよ……」

先ほどからこんな調子である。会話が成立しない点では最初と変わりないのだが、これはなにかベクトルが違うような気がする。

おしとやか、というには無理があるようだが。

語彙に自信がない幹は、すっきりしないものを感じながら頭を掻いた。

「なんにも言わないってことは、イエスととっていいんだな？」

何時間か前に重い話をしていたはずの化学教師はどこに行ってしまったのだろうか。幹はこれ以上この中年男と話をしたくなくなっていた。修司や三枝以上に、この男と話をしていると疲れるからだ。「もうどうとでもとつてくれて結構ですよ。それと俺はもう帰りますから、沙雨のことは先生に頼んでもいいですか？」

「あれ、打ち上げには来てくれないの？」

「わりい、疲れたから帰るわ」

修司からの誘いを断り、これでようやく家に帰ることができると思った。渡辺が約束通り口利きしてくれるかは信じるしかないが、幹から言わせればやるべきことはやったというところだ。

今日はいろんなヤツに愚痴を聞かされて、走って転けて怪我までした。もうさつさと家に帰って布団に入りたい、いやその前にシャワーを浴びるか、傷にしてみるよなあ……。

「おい、誰が頼まれたって言った」

渡辺はそう言っで幹の襟首を掴む。回れ右して家路に向かっていった幹は、おふつと言っで咳き込んだ。と言っより、首が締まった。

「オレはこれから夏期講習と補習の準備をせにやなんのよ。だからこの嬢ちゃんはお前が責任もつて家まで送り届ける」

渡辺はそれっぽい言い訳をするが、不満たらたらな幹は簡単には

引き下がらない。

「夏期講習ってまだ二週間先じゃないですか、それに化学は補講しないって話じゃなかったんですか!？」

「あー、それな、今になって気が変わった。やっぱしやるわ」

「はあ？」

ちつつちつと舌打ちしながら渡辺は幹の肩に腕を回す。暑いのにタバコ臭い中年にそんなことをされては、さしもの幹の顔も引きつっている。渡辺は顔をぐいっと近づけて、沙雨に聞こえないようひそひそ話を始めた。

「なあ、幹よ」

「はあ、何ですか？」

「これはチャンスだと思わねえか？」

「何のですか？」

馬鹿馬鹿しいのでしらを切る幹に、渡辺もわざとらしく大きなため息をついてみせる。

「幹くん。男がいて女がいるんだ、それ以上は何も言うことはないだろ？」

目を輝かせながら言いよる渡辺は、本当にうつとうしかった。だから幹の言葉もついつい強いものになってしまった。

「下世話ですよ、俺はアレをそういう対象として見ていません」
すると、渡辺は目をぱちくりとして、

「……マジか」

「マジです」

「まあ関係ねえがな」

「は？」

幹が聞き返すよりも早く、渡辺は大声で簡潔な指示を出した。

「オレはさつさと帰って仕事を片付ける。修司は女の子を待たせるな、遅れたらぶつ殺してやる。それから幹、姫サマのエスコートは丁重に。以上、解散!」

そう言ってさつさと駅に向かう渡辺。昼休みのことを除いたら、

帰り際になつてようやく教師らしい仕事をしたのではないだろうか。それを見送った形になる幹達三人だが、今度は修司が真面目な顔をして幹と沙雨に、

「それじゃあ、気をつけて帰ってね」

と言い、シユパツと手を上げ敬礼して帰ってしまう。

そうして幹と沙雨の二人が用賀北小学校の校門に残された。

それにしても気まずいなあと幹は思った。

だから、沙雨の方から話しかけてくれた時は、正直ホツとしていた。情けない話だが。

「もう、いいから」

「は？」

何がいいんだ？

「お母さんに電話して、迎えにきてもらうから。あなたはもう帰っていいわよ」

ああ、そういうことが。なるほど。

「あー、だったらおふくろさんが来るまでここに居るわ」

「そう、じゃあ、それでいい……」

さつさと帰りたいとは思うが、女の子を一人で置いてけぼりつてのはあまりよろしくない。小学校の先生方も渡辺達と一緒にさつさと捌けたみたいだし、他についてる大人がいないのならもうしばらくは拘束されていても仕方ない（エロくない意味で）。

けどそれはまた気まずくなるわけで、言ってみてから5秒後には少し後悔してしまった。

「それにしても暑いな……」

沈黙に耐えきれずに口にしてみたが、実際にものすごく暑くなってきた。

遠くからは蝉の鳴き声が聞こえてくる。アスファルトは太陽光線を浴びて熱を帯び、車道には陽炎が浮き立っている。七月のアタマにしては規格外に暑い。

このまま気温が上がっていけば、12月には60度を超えるかも

しれない。誰が言ったのかは忘れたが、今ではひどく共感できる。確かに、地球温暖化は全力で防ぐだけの価値があるかもしれない。寒すぎるのも嫌いではあるが。

「暑いわねえ……」

沙雨も幹の言葉にうなずいた。日傘を車椅子の背に掛けて（多分ペットボトルなんかを置いておくためのものだ、水分補給を怠ると車椅子の人はエコノミークラス症候群になることがあると新聞で読んだことがある）日陰を作り、扇子でパタパタと顔を煽いでいる。ちやつかりスポーツドリンクを貰っていたらしく、そいつで小さな顔や細い腕を冷やしたり、時々口にしたりにしている。日傘を除いたら、甲子園の地方大会の応援にきた女の子といった感じである。

「ふう……」

沙雨はしなを作るようにして小首をかしげ、体を少し伸ばした。もつとも動かすのは上半身だけで、下肢はそれに合わせて申し訳程度に揺れるようなものだが。

それから車椅子の上で体を揺るようにして座り直し、腿の上に置いていたペットボトルのふたを開け、少しだけ口につけた。女の子は人前でドリンクをガブ飲みしないものなのだろうか、身近の女を思い浮かべてみてもさして参考にはならない。女の子にしておくにはもったいないヤツばかりだ。

暑い、それはよく分かる。何せ幹には日傘も扇子もキンキンに冷えたスポーツドリンクも無いわけだから、体感温度は5度くらい違うはずだ。いや、車椅子に座っている分楽そうだから、あと2度は違うはずだ。

「それ、一口くれよ」

「え？」

しらはつくれるかこのアマめが。

「ポカリ飲ませてくれよ」

暑くてダルくて死にそうなんだよ、とは言わない。余計暑苦しくなるのがオチだから。

「ポカリ飲ませろ」

大事なので2度言ってみた。2度目は強めに。

沙雨はポカリと幹を見比べ、それから若干間をあけてから

「イヤ」と断った。そりゃあもうにべもなく。 がっくりと肩を

落とし、思わずため息までもらしてしまふ。卑しいとは分かっているが、よく冷えたアクエリアスは本当に美味そうなのだ。「せめて

一口」

「……キモ」

「は？ なんつった？」

「……ううん、何でもない」

今度は沙雨の方がため息をついた。

まったく、そこまでアクエリアスが惜しいのか。それとも、回しのみが嫌なのか。そんなもの、幹の中学では気にした方が負けだというくらいの勢いがあつたもののに……。

はあ……、と、今度は二人でため息をついた。うだるような暑い昼下がりで、二人は待ちぼうけだった。

そのまま五分ほど経った頃、ようやく沙雨の迎えがやって来た。

沙雨の母親は至って普通の女性で、女手一つに子供を養っているとは思わせない人だった。顔立ちは沙雨と似ても似つかない、それでいて親子といわれたらそんな気がするから不思議だ。苦勞を感じないのか、それとも隠すのが上手なのか、その表情はなかなか若かった。

化粧は濃い気もしたが、この年だとそれが普通なのかもしれない。十代でこれだと確実にアウトだが、この年だと薄化粧はキツイから、ここで妥協しましたといった感じ。

年上の女性にヘコヘコと頭を下げると、幹は手持ち無沙汰になった。沙雨の母親が慣れた手つきで娘を助手席にのせると、車椅子をたたんで後部座席に詰め込む。結構な重労働といったら失礼かもしれないが、それを感じさせない慣れた手つきだった。手伝おうと申し出たが、やんわりと断られてしまった。この柔らかい物腰も、幹

の周囲の人間には無いものだった。

「それじゃあこれで失礼しますね。今日は娘のこと、ありがとうございました」

「いえ、そんな……」

本当に何も出来なかった幹からすれば、頭を下げられても嫌がらせでしかない。軽く自己嫌悪しそうである。

この手の女性は慣れない。沙雨よりも、下手すれば苦手かもしれない。

とはいっても、どうせこれっきりの関係になると思うが。

「そんじゃあ沙雨、じゃあな」

「うん、ばいばい」

別れのときは存外にあっけなく、沙雨の母はためらい無くアクセルを入れた。

排気ガスを吐き出したS X 4セダンは、図体に似合わず軽快に走り出す。

車体が見えなくなるまで見送ると、それからもう少しだけそこに立ち尽くし、それから幹は家路についた。

その日の帰りはぼんやりとしていたんだろうか、思いがけない災難にあった。電車の中で（素行が悪い）先輩の足を踏んでしまった。そしてお決まりのトム&ジェリーごっこ。気力も体力もスカスカだった。何とか逃げ仰せた。本当に厄日だ。さっさと家に帰ろう。余計な寄り道になった。

思った以上に秀太はやってくれた。沙雨ちゃんの担当になってくれたらとは思っていたが、まさか本当になってしまふとは。やっぱり秀太は良いやつだ。面白くて良いやつだ。三枝さんが気にするわけだ。きつと今日のことは、幹にも沙雨ちゃんにも大きなことになるだろうな。

なんでガキにあんなことを喋ってしまったんだろうか。年を取ったのか、感傷的になったのか、それとも弱くなったのか……。自己嫌悪だ。今日は酒を飲もう。酔うまで飲んで、酔ってから飲んで、気を失うまで飲もう。悪い気は酒で洗い流そう。そうしよう。

疲れた。本当に今日は疲れた。疲れたと感じるなんて、何年ぶりだろう。分からないなあ。もう何年も家に閉じこもっていて、急に外に連れ出されたみたいな感じ。冷房が効いた車の窓を、少しだけ下ろしてみる。強い風が、前髪をさらっていく。私は前髪を撫でた。目を閉じた。シートに身を沈め、疲れに身を任せた。悪くないかもしれない。少しだけ、そう思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9916g/>

とべない悪魔

2010年10月11日13時36分発行